



TITLE:

花山だより(九月)

AUTHOR(S):

星見山人

CITATION:

星見山人. 花山だより(九月). 天界 1934, 15(163): 27-29

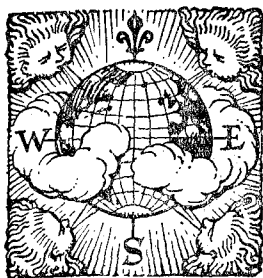
ISSUE DATE:

1934-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166906>

RIGHT:



花山だより (九月)

關東地方大震災から滿十一年目の月も同じ九月に、關西地方が大風害に見舞はれた事は既に十分御承知の通りです。山上にあつて日頃、四方特に東と南の展望を誇る吾が花山は、此の21日の風魔にとつて好餌となり、被害程度は京都の代表的と言つてもよい程です。當日花山に於て得た諸種の記録を総合すると情況は大體次の様である。前日(20日)正午頃まで755耗だつた氣壓は次第に降下し始め、夜半頃750耗、それより漸次急下降となり。21日8時よりは急激なドロップを起し8時30分頃極限の718耗となる。其後の回復は速で、正午頃750耗、20時に755耗となつてゐる。風向は前日より東風で、21日8時頃より次第に南へ廻り始め、8時30分は正南であり9時頃より西に移つてゐる。而して倒壊家屋や樹木の殆んど凡ては、南寄りの風にやられてゐる。風速は21日0時に7米であつたのが次第に増大して4時頃13米を示し、8時頃までは16米であつたのが突然強くなつて29米を越し、8時半頃よりは遂に34米に達して最高となつた。併しそれより20分後には19米に下り、9時頃には14米、11時には5米と急激に弱まつて行つた。

此の強風に會つて木造建は殆んど全滅した。即ち46樞反射鏡は倒壊家屋の下敷となり、25樞鏡は家屋諸共倒壊し、シロスタット、シデロスタット等の屋根三棟共に脱線倒壊、25樞鏡舊家屋(幸ひ移轉直後で中には何も入れてなかつた)も倒壊、此等は何れも原型を止めぬ程無慘に破壊し去られてゐる。官舎も屋根は勿論、壁天井等半ばを吹き拂はれ、全く宿泊不能となる。木造建物中全きを得た唯一の子午線館も移動式屋根が脱線した。コンクリート建築物は流石に堅牢であつたが、吹き飛ぶ木片や瓦で窓ガラス數枚を破られ、大ドームは亜鉛板を殆んど吹拂はれ衰れな赤裸となり、スリットは脱線。アンテナ用大鐵柱の一本は鉛の如くに曲つて、送電線に倒れ懸る。其他極軸望遠鏡の覆は飛び、芝生上には雨量計や百葉箱の屋根、官舎の瓦、屋根板等が一面に散亂し。井戸ポンプに到る動力用電線は、所々に倒れた直徑尺餘の松樹

の爲めにすたすたに千切れ、電柱も倒れた。又電話線も同様に千切れて了つた。只幸な事には望遠鏡諸機械（反射鏡を除き）並に天文時計が無事であつた事と、臺員一同無事であつた事である。負傷者こそ出さなかつたけれども各自の布團衣類等は吹落ちた壁土と雨の爲めすつかり泥まみれになつて了つた。

——風治まつて見かへれば、永年住み馴れた官舎は廢屋の如く、壁落ち天井は抜けて棟木のみ空しく残り、構内に倒れ伏す屋根や柱木の間に薄の穂のみ風にゆらいで荒野に等しい、昨日に變る今日の姿に感慨無量なるものがある。

然し臺員一同元氣に復興の意氣に燃へて、21日朝まだ風雨も治まらぬ中に、自働車もなく徒歩で登山された山本臺長の指揮の下に應急處置の部署に付いた。先づ倒壊した25糎並に46糎鏡の重要部分を取はづして、前者は別館、後者は本館に運び、シーロスタツト類は油紙トタン等で覆ひ、大ドーム内のクック機は重要部分を防水布、毛布で包み、極軸望遠鏡はトタンで覆する。百葉箱の屋根は飛んだが幸ひ壞れなかつた。又短かいながら假アンテナを張る。官舎に居た人々は凡ての私物品を本館内の各自の研究室に運び、其處に寢泊りする事となる。又食堂は太陽館に移る。尙午後には山本教授夫人が御宅の窓ガラスの破片で負傷された手を繃帶のまゝ二令息を連れて見舞に來られ、吾々の作業を手傳はれる。15時には御土産の菓子で一休みして一同元氣回復。丁度其の頃上田教授、今井氏、松村氏が自働車で來られ被害調査をされた。

翌22日は臺員總がかりで25糎鏡の全部を分解してピラミで凡てを別館内に納める。又アンテナ柱が電線に懸つてゐては送電不可能なので一同で取除き作業中、幸ひ電燈會社より四名保線に來て呉れたので一緒に作業を繼續、やつと取り除く事が出來た。これで今夜より本館には電燈が點くわけであるが、井戸ポンプは未だ使用出來ないし、タンクの蓄水も少量なので水の使用は極度に節約を要し、入浴は勿論泥まみれの衣類の洗濯も出來ぬ。大ドームの亞鉛板や瓦等使用出來る物は出來る丈拾集する。午前中に理學部長と事務室の荒木氏被害調査に來られる。本日は例會及夜間公開がある筈を中止した。例會出席の目的で熱心家が十名程も來臺、被害の大きいのに驚かされてゐた。

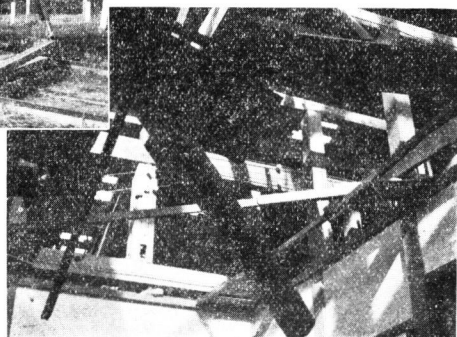
23日は花山より明月觀測の中繼放送がある豫定であつたが中止となる。24日は文部省より被害調査に來られる。23、24日と休日が續き作業に一頓挫を



46種反射鏡室の惨状
(應急處置後撮影)

來したが、25日水不足救済のため事務室の荒木氏の骨折りで大

屋根が飛び、天井が壊れ、壁が破れ、雨水に敲かれた構内宜舎の一室



學電氣掛より職員電工各一名來てもらひ、臺員總出で井戸まで四丁程の間、倒れた樹本の伐採

電線の架設等の作業をなし、夕暮れ頃やうやくポンプが動く様になつた。山本教授は日食會議のため27日までの豫定で東京へ出張される。26日は雨天にて作業出来ぬ。ポンプの動かなかつた間、山本教授御宅より炊事不自由だらうと毎日食事を運んで下さつたし、26日は柴田氏御宅の出産祝の赤飯があり、風害以後は却つて御馳走續きで一同大喜びである。27日は人夫二人來て呉れたので臺員一同總がかりで巨大な46種鏡を分解、脚部を残して大半を本館に運ぶ。それより大アンテナを倒れた柱より取はづして構内用弱電々柱の上部に結び付ける。大學營繕課より職員一名來られ營繕關係の被害調査をされた。

尙本月3日小山先生方は嬢ちやん御安産、とてもよく肥えて御丈夫そうな赤ちやんです。山人謹んで御祝ひ申し上げます。(星見山人)

謹 告

本會副會長水野千里氏母堂比傳子刀自去る十月十六日八十四歳の高龄を以つて永眠せらる。茲に會員諸氏に報じ、謹みて深く哀悼の意を表す。

昭和九年十月

東 亞 天 文 協 會